

九条道家の宗教生活

龍口 恭子

九条道家(一一九三—一二五二)は鎌倉時代初期、朝廷・幕府において政治的に絶大な権力を誇り、承久の乱(一二二一)以後もなお権勢は盛んであったが、幕府との関係は次第に悪化し、公的な立場では不遇の内に一生を終えたと思われる。

一方、宗教的活動については如何であったろうか。父祖伝来の地、即ち京都月輪に藤原忠平が法性寺を創建(九二五年)以来三百年余り、法性寺及びその地は藤氏の深く愛する所であったが、道家もこの地を好み、東福寺を創建し、泉涌寺を支援する等、時代に先駆けた行動は注目値する。京都の南東に位置するこの二寺は今に威容を誇り、加うるに、応仁の乱で焼失の後、再建が叶わなかった光明峯寺と併せ、東山の一角に道家の理想郷とも言える寺域を形成したのである。現在では東福寺、泉涌寺は、それぞれ独立した寺院だが、当時は道家とどのように関わっていたのかを確認することが本論の目的の一つである。

また、道家は四十六歳の時、叔父である比叡山飯室の良快を戒師として出家するが、また善慧房證空より受戒もしている。證空は法然の高弟であり、専修念仏には祖父九条兼実よりの因縁があった。このように種々の宗派に接した道家の宗教生活の全体像を捉えるのが本論の目的とするところである。以上の事柄の解明を念頭に、道家の日乗『玉蘂』に拠りつつ、道家の宗教生活を概観し、鎌倉初期における一貴族の宗教意識をたどってみたい。

道家においてまず何よりも大事であったのは、氏の長者としての政治的・宗教的責任である。藤原北家の忠実・忠通・兼実と続いた摂関家の長として君臨した父良経を十七歳で失って以来、一族の重責は道家に負わされ、道家の宗教生活は、まずは一族の繁栄を祈ることであり、その結果としての往生極楽であった。従って、造寺・造像・写経・供養など、様々な作善を行う事によって、その功德によって仏神の加護を願い、一族の繁栄、自他の往生を願ったのである。春日神社に奉納した「九条道家願文」には、そのような道家の切実な願いが吐露されている。そして事実莫大な量の作善を行っているのであるが、そのための資力が必要とされる。氏の長者となった道家には幸いにそれが可能であった。平安時代末、藤原氏の莊園をほぼ総領した藤原忠通から、その長男基実に大部分が譲られ、近衛家領となり、一部は聖子に譲られ九条家領となるが、聖子から兼実の長男良通に譲られたものの、良通は早世したためその親の兼実の所有となった。その後、兼実の娘、宜秋門院任子に譲られたが、その甥である道家は、八歳で母を、十四歳で父を亡くしたため、宜秋門院に庇護されるところが多く、財産も道家に伝領されるところとなり、建長二年(一二五〇)の道家の惣処分状には全部で一一二ヶ所が記されている。かくも膨大な莊園からの収益が道家の作善を支えていたと言える。

次に浄土宗の信仰について考えるに、道家の浄土宗、専修念仏への縁は祖父九条兼実(一一四九—一二〇七)より始まる。兼実は周知のように法然の篤い庇護者であり、娘宜秋門院任子(一二七三—一二三八)に続き、兼実自身も建仁二年(一二〇

二、法然を戒師として出家した。八歳で母を失った道家に対して、兼実は殊の外、身を案じ、結局その養育は宜秋門院に委ねられた。叔母のもとで育った道家は、十六歳で西園寺公経の婿となつて後も、叔母と共に『選択集』の講義を聴聞した。また善慧房・念仏房から受戒している。また『他筆抄』を観鏡房に書かせる等、専修念仏に帰依したことが伺える。また当時、新興の宗派であつた禅宗にも道家は関心をよせ、宋より帰国して博多に滞在していた円爾を京都に呼び寄せ東福寺を創建した。また隣接した地にある泉涌寺の俊仍の思想にも共鳴し、多大な援助を与えている。道家の信仰はこのように新進の僧侶の支援にもあつたと言えよう。

道元禅師の修証観——十地・等覚について——

清藤 久嗣

前回までの考察では、道元禅師の坐禅観についての考察と、『正法眼蔵』『坐禅箴』巻の成立史についての考察を進めてきた。禅師の撰述書である『正法眼蔵』『坐禅箴』巻で説示される「かれらが所集は、ただ還源返本の様子なり、いたづらに息慮凝寂の経営なり。観練薫修の階級におよばず、十地・等覚の見解におよばず」と、天台要語である緻密な修道階位説を使用して中国禅の修証観を批判するという手法が取られている。本稿では「十地・等覚の見解」とは何であるか具体的に考察するものである。この分野の纏まった先行業績は宗門内外で多数の研究がなされているが、天台要語の修道階位説である菩薩五十二位の中の十地・等覚と道元禅師の修証観との視点のみに限定

した詳細研究はなされていないことから今回の問題提起となつたものである。

まず仏教における修道論とは、「いかにあるべきか」という実践修道の面にあり、釈尊の態度は応病与薬である。その数は八万四千の法門といわれる。代表的な一つには三十七品菩提分法であり、二つには三学（戒定慧）である。

その修道論の中で重要なことは修道階位であるが、釈尊は修道階位をまとめて説かれることはあまりなかった。しかし初步の悟りを得て四双八輩というような聖者位を進むことは、すでに阿含経に説かれている。次に説一切有部の修道階位とは、原始仏教や部派仏教では修道の最高位は阿羅漢とされて仏陀とはされなかった。つぎに大乘菩薩の修道階位では、大乘仏教ではすべて菩薩の修道階位を説くようになったが、これも宗派によって階位説に相違がある。それは唯識法相宗の修道階位の五性格別である。そして天台教学の修道階位とは、一切衆生悉有仏性・一切皆成である。まとめると、仏教史上では修道論として修行の重要性は説くものの、釈尊以外は修道階位があり、凡夫位から聖者位に段階的に進む修道階位となる。道元禅師は日本天台での天台止観の実修と天台教学にある菩薩五十二位の十地・等覚を学んでいた。

一 如上の観点より、仏教史上における修道論にある「十地・等覚」という修道階位（修証観）の変遷の全体像を道元禅師は良く理解されていたものと思われる。

二 比叡山等の日本参学時代の初期に、天台止観の四種三昧・常坐三昧を実修されて、その修道階位（修証観）である菩薩五